

第23回 ちゅうでん教育振興助成（2023年度）

小・中学校の部 報告書資料

学校名・団体名	女川町立女川小学校
コース	学校支援コース
活動・研究のテーマ	命輝く女川町「小学生が見つけた女川町の魅力」発信

<活動・研究の意義および活動報告>

1 活動に至る経緯

本町は、先の東日本大震災で甚大な被害を受けた地域で、地域の流失、人口減少に伴い町内の小中学校を、施設一体型小中一貫校とした。町の復興には、これからの町の発展を担う人材育成が大切であるそのためには、教育活動の充実、特に学校教育目標である「命輝かせて女川を愛し 志をもって未来を創る心豊かでたくましい児童の育成」を目指し日々の営みが大切である。宮城県NIE実践指定校（2年目）の活動の充実と発展の活動を、町教育委員会、一般社団法人まちとこ女川向学館と連携しながら、より実りある活動実践を計画したものである。

2 活動・研究の目的（ねらい）

- ・学校内、地域での児童の活動を通して、ふるさと女川の魅力を知り、郷土を愛する心を育み、コミュニケーションを高めるとともに、自ら発信する力を養う。
- ・新聞作成、ふるさとポストカード、旅たよりなどの活動を通して、町内の人々と触れ合う機会をもち、町の活性化に寄与する。また、海外の小学校との交流を通して、視野を広げるとともに、日本、故郷女川町の良さを見つめ直す機会とする。

3 活動内容

①女川小子ども供記者による「ふるさと女川新聞」発行<令和6年2月1日>

子ども記者を募集し、新聞記者、写真家による記事作成のノウハウを学び、学校、町の様子を取材から行い、女川の魅力（人、自然、産業、史跡・文化）を子ども目線で発信。A4・8ページ版の新聞とし、3,000部印刷。町内毎戸に町広報おながわとともに配付。学校教職員や、町内公共機関などに置き、無料配布した。取組の様子は、NHKテレビ、地元新聞でも紹介され、町民の方々からも、町の良さを再認識できる元気をいただく新聞であるという感謝の声や続編を望む声を数多くいただいた。

②女川小子ども写真家探検隊による「みんな大好き・女川町ポストカード」作成。

女川小子ども写真家探検隊を募集し、プロの写真家による指導を受けながら、撮影のノウハウを学んだ。写真家と共に、1日ばかりで町の名所などを回り子ども目線で町の魅力を撮影した。「小学生が撮影したふるさと女川ポストカード」として、3,000枚作成。女川小調学校全校児童生徒教職員、学校関係者に配付するとともに、町内の公共施設、商店などに置き、町民や観光客などに無料で配付する体制をとった。特に、女川温泉ゆぼっぼでは、作成した児童自らが、町外の温泉利用客に手渡しでプレゼントすることで、とても喜んでいただいた。

③女川小子ども写真家探検隊による「ふるさと女川写真展」<令和6年2月2日～7日>

②の活動と共に、児童が撮影した写真を中心に、女川まちなか交流館で、標記写真展を実施した。写真展については、地元新聞、ラジオでも紹介され、多くの来場者が訪れた。子どもたちを指導した、鉄道写真家 武川健太氏の写真解説コーナーもあり、手作り感のある魅力的な写真展となった。子ども目線で見た女川町の新たな魅力を知ることができた・と来場者からも好評であった。

④旅先からのメッセージ 第5学年 花山自然教室 6年 福島県会津若松だより <9月>

学校外に宿泊を伴う、旅行・合宿時に、地域の絵葉書・ポストカードを現地で作成し、投函する。活動。事前に、はがきの書き方、住所等の指導を行った。基本、自分の家族、お世話になっている方ということにした。保護者からは、遠く花山・会津若松の風を運んでくれたと好評で、町長、教育長などへの葉書については、直接感謝の言葉を伝えられ、子どもたちも感激していた。

⑤ 女川ボックスの作成・台湾の小学校への送付 〈2月〉

放課後の居場所づくりとして、町教委で実施している、おながわ放課後楽校参加児童を中心に、昨年度から交流している、台湾の崇華小学校等へ、女川の魅力の詰まった、「女川ボックス」を作成した。活動希望者を募り、町内の観光物産店で、店員さんに相談しながら、女川を伝える商品を選択。女川の魅力の詰めこんだ。海産物の缶詰や加工品、町のキャラクターをアレンジしたオリジナルグッズなど観光パンフレットとともに箱詰めした。昨年、台湾からいただいた、台湾ボックスの返礼の意味もあり、今後の交流活動の発展につなげていきたい。

⑥ 新聞社で公募している意見文等への投稿活動。

子どもたちの日々の生活の中での気づきと共に、ふるさと女川の魅力をテーマとした作品を投稿する活動を行った。(NIE 教育推進事業) 高学年児童を中心に、意見文作成、投稿する中で、地元河北新報「声の交差点」小中高生の意見として、掲載していただいた。(令和5年度10人) 意見文の内容も、魚市場、女川温泉を取材したこと、郷土芸能女川獅子振りへの思い、手紙のやり取りから学んだこと等、本テーマに迫るものも多く、読者の反響も大きいものがあった。また、新聞紙を使った書道コンクールに積極的に参加、作品を応募する児童も見られるようになった。自由課題であるが、ふるさとの「江の島」と書いた児童もいた。

4 子どもたちへの効果(成果, 課題)

【成果】別添・ふるさと女川新聞、女川大好きポストカード、活動内容掲載記事(写)参照

- ① 新聞を作成する過程を通して、ふるさとの良さを見つめ直すと共に、総合的な国語力の向上、新聞に対する興味関心が高まった。特に、町広報担当者から、広報誌作りの過程や工夫、町への思いを聞いたことで、自分たちも町民の一人として、これからの町を築いていくという小さな自覚を持つことができた。また、取材する中で、世代間を越えた交流も生まれた。新聞に対する高評価、生の声が数多く届いたことが、子どもたちのやりがいと自信につながった。また、作ってみたいという感想が多く聞かれたことは喜ばしいことである。
- ② 自分たちが作成したもの(新聞・写真・パネル・ポストカード・意見文)を外部に発信する過程で、作成時、配付時のコミュニケーション力が育まれた。自分たちの活動が形になること、周囲から認められるで、子ども達の充足感が高まり、自己肯定感を育む機会となった。児童会活動や学級活動のなかでの新聞作成についても、積極的に工夫していこうとする機運が見られた。
- ③ 日常生活の中で、手紙やハガキを書く機会が減りつつあることが懸念されているが、あえて相手を考え旅先から投函する体験は、国語力を育むだけでなく、人と人との絆を育む機会となった。中に、会津若松市在住の方と、新聞投稿を通しての文通(小6と地元の高齢男性)交流もあり、修学旅行当日には、宿舎を訪ねてこられての交流などの微笑ましい姿も見られた。相手を意識しながら、丁寧に字を書くという意識も芽生え、書写能力の向上がられることとなった。
- ④ 異国の小学生と交流することで、国際的な視野を持つとともに、国土、ふるさとを見つめ直す機会となった。女川ボックスの中身の選定にあたって、(女川の名産品・魅力とは何なのか)という原点に立ち返り、再度女川の持つ資源を考える機会となった。
- ⑤ 学校内外での、外部からの協力者を含め、町民と多様な活動に関わり合うことで、町民との交流が至る所で生まれた。子どもたちが、自分が社会とつながっている・町民の一人であるという思いも感じ取ることができ、町活性化の一助を担うことができたという自覚を持つことができた。

【課題】

- ① 子どもたちの活動や町の魅力を多くの方に知ってもらえることとなった。これを一過性のものとすることなく、継続、発展させていく方法を模索していく必要がある。
- ② 活動にあたっては、高学年を中心に公募という形をとってきたが、個人の事情もあり、活動の裾野を広げることが難しかった。多くの児童に実際の活動を通して学びを深める機会を提供していきたい。また、課外時間や自宅での活動が多かったため、指導に当たっての十分な時間を確保できなかったことがあげられる。他機関との更なる連携を考えながらより良い指導の在り方を考えていきたい。
- ③ 本校は、施設一体型小中教育一貫校である。同じ校舎の中で九学年が学校生活を送っている。今回のふるさと女川新聞の制作では、小学生の作った女川川柳を中学生の生徒会役員が審査し、生徒会長が励ましのメッセージを送る等、小中の交流も生まれた。今後、中学生の力を生かした活動や、小中連携しての活動も考えていきたい。また、学校の枠を超え、地域の方を巻き込んだ活動の可能性というものを将来的に考えていきたい。